

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 杉山友実子姉

開 会 招 詞 詩編24編7-10節

\* 賛 美 歌 5:1 (ソングシート)

1. めぐみゆたけき主を ほめたたえまつれ、そのみいつくしみは ときわにたえせず。

救われしみたみよ、おごそかにうたえ、「憐れみとまことはかわることなし」と。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をめぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人

のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 5:2 (ソングシート)

2. なやみせまるときも み名をよばわれれば、主はこたえたまいて、この身をばすくい、

いとひろきところに いこわしめたもう。主ともにましませばわれにおそれなし。アーメン

公 同 の 祈 禱 40 新年礼拝

天地創造の活けるまことの神さま、大地はあなたによって基を据えられ、天はあなたの御手のわざを示しています。しかも天地が減びてもあなたはいまし、常に変わることなく、あなたの年月は尽きること

がありません。それゆえ、わたしたちはあなたをほめたたえます。天上の賛美にわたしたちの声を合わせ、あらゆる時代のあらゆる場所の全ての聖徒たちと共に、あなたの栄光を永遠に誉め讃えます。アーメン。

(詩編19、マタイ24、ヘブライ13)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 札幌伝道所 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 エレミヤ31章15-17節 (旧約聖書1235頁)

マタイ2章16-23節 (新約聖書3頁)

説教・祈祷 「自由のおとずれ」 杉山昌樹牧師

\* 賛美歌 26:1-2

1. 子羊をば 誉めたたうる 妙なるものの音 あめにきこゆ。いざ御民よ、めぐみの主に、さかえの冠を ささげまつれ。

2. みつかいらも うち伏すまで、我が主の御傷は teriかがやく。いざ御民よ、すくいの上に、さかえの冠を ささげまつれ。アーメン

\* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 68

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。アーメン

\* 祝 祷

後 奏 (黙祷)

報 告 門脇陽子長老 (司会・受付 次週：古澤純一長老)

本日 受付 1階：那珂信之・藤井牧子執事 2階：大日南隆夫執事 /ZOOMホスト・録音：雨宮信

次週 受付 1階：古澤迪子・森永美保執事 2階：佐藤紀子執事 /ZOOMホスト・録音：大日南信也

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

## マタイ2：13-23 「自由のおとずれ」

### 新しい年、新しいこと

新しい年を迎えました。私たちはこの新しい年、時の区切りもまた神様によって与えられたことを知っています。そのうえで、この年、あれもしたい、これもしたい、と思いつめぐらしておられるかもしれません。そのような私たちの希望をしっかりと支えるものがあります。それは何よりも神様のご計画がすでに実現していることです。先ほどお読みしましたマタイによる福音書は実は13節から23節までが一つのまとまりです。その筋書きだけを取り出してみますと、幼子であったイエス様が家族に連れられて、ヘロデ王から逃れるためにエジプトに行き、やがてヘロデ王が死んだので、イスラエルに戻り、ガリラヤのナザレに落ち着いた、ということになります。そして、この一連の出来事には、当然目的がありました。その目的とは15節の途中に書かれている言葉によって示されています。「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」とあるところです。もともとは、ホセア書11章のことばのようです。しかし、このところの意味ははっきりとしています。それは、神様がイエス様を呼び出す出来事をもって、新しいことを始めるそのしるしとなっているということです。

### 神の計画、引き出されるため

先ほど、エジプトに逃れ、そしてエジプトから呼び出す、というこの出来事のあらすじを確認しました。この事でピンと来た人もおられるかもしれません。ほかでもない、この流れは、出エジプトのモーセのたどった歩みをなぞっています。若いモーセがファラオの追及から逃れるために、エジプトに向かったように、イエス様とその家族も、エジプトに逃れられ、そして、モーセがファラオの死の後、神様に召し出されて、エジプトに向かい、イスラエルの解放者となったように、イエス様もまた、神様に呼び出されて、エジプトから約束された地であるガリラヤに戻っていく、新しいことを始めるために、帰っていく、そのことがここで行われているのです。その意味では、ここで起きていることに無駄なことは一つもありません。すべて、神様のご計画が着実に実現するために、一つ一つの出来事が積み重ねられています。では、この一連の出来事、イエス様がガリラヤに落ち着かれていく様子を描く、この出来事はいったいどのような意味で私たちと関係しているのでしょうか。結論から言いますと、それは私たちの生き方、それも特別な時というのではなく、特に何も考えていない日ごろのあり方、今日のお昼は何にしようか、とか、午後の仕事はきついなと思っていたりする普段着の生活のあり方にかかわってくるはずなのです。そこで一つのことをまず確かめてみます。

### 子殺しをするのは人間

今日はあえて、16節から読み始めました。そこで書かれておりますことはかなりひどい出来事です。先ほど出エジプト記ということを行いましたけれども、まさに、ファラオがイスラエルの人々を恐れ、その力を弱めようと、生まれてくる男の子をみな殺すように命じたという出来事（出1：22）そっくりのことをヘロデ大王が実行した様子が示されています。ベツレヘムとその周辺の2歳以下の男の子を殺させるというのは大変な悲劇です。

### 闇が覆っている？

しかし、そこでなお考えたいことがあります。それは、そもそも、このような出来事の責任は誰にあるのかという点です。ヘロデ大王は、自らの地位を守るためには、妻や息子たちをも次々と処刑してしまう人でした。自分が王でいたい、そのためには人の命を奪うことを躊躇しない、全く身勝手な理由で人を殺してしまう、このような悲惨な行動の根っこにあるのは権力を持つものの我儘さです。そして、本来であれば、守らなければならない自分の民の命を自分の手で殺してしまうことをしてしまっているのです。それは、あるべきものがあるべき姿をしていない、ということです。大きな不安が、闇が覆っている状態です。そしてこのような我儘を振り回して周りの人を殺そうとしていくようなありかたは、遠い昔の出来事ではないのです。いや、そもそも、歴史の中の戦争や悲惨な事件、たとえば今続いているウクライナの戦争も、ミャンマーでの軍隊による民衆虐殺も、突き詰めていきますと、本来

は良い政治をするために立てられた人間の身勝手さによって引き起こされています。それでは、このような身勝手さは、ただ為政者と呼ばれるような人、一部の権力を持っている人たちの責任なのか、と言いますとそればかりではないのです。

#### ラケルの悲しみ

本来あるべきように生きられない人間が招いた悲惨さについて、マタイはこのところの17、18節でエレミヤ書の言葉を引いて見せています。そこを読みます。「こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。「ラマで声が聞こえた。激しく嘆き悲しむ声だ。ラケルは子供たちのことで泣き、／慰めてもらおうともしない、／子供たちがもういないから。」。ここで登場しますラケルはヤコブの妻ですが、エレミヤの言葉は創世記の中の実際の出来事ではありません。むしろ、預言者エレミヤはこの言葉によって、バビロニアによって攻められ、多くの人が命を落としたユダ王国滅亡、という彼の時代の厳しい現実を描き出しています。それは、もはや慰めさえも受け取ることができないほどの悲しみに包まれている状態です。それを一人の人ラケルの嘆きとして語っているのです。ところで、このエレミヤ書には当然ですが、その前後の文脈があります。このマタイで引用されておられるのはエレミヤ書31章15節ですがその少し後にこのような言葉があります。「わたしはエフライムが嘆くのを確かに聞いた。「あなたはわたしを懲らしめ／わたしは馴らされていない子牛のように／懲らしめを受けました。どうかわたしを立ち帰らせてください。わたしは立ち帰ります。あなたは主、わたしの神です。わたしは背きましたが、後悔し／思い知らされ、腿を打って悔いました。わたしは恥を受け、卑しめられ／若いときのそしりを負って来ました。」」 (31：18, 19)。

#### その先にある希望

このエレミヤ書の言葉で特徴的なのは、イスラエルが懲らしめを受けているという理解です。「若い時のそしりを負って来ました」という言葉があります。エレミヤ書31章では、イスラエルは自らの罪、神様への背きによって苦しんでいるという前提があります。しかし、やがて回復が与えられるであろう、という言葉が続きます。しかし、問題は、この裁きと回復の間です。あるいは、裁きに続く癒しは、どのようにして起きるのかです。本当の意味で私たちが回復されるために、エレミヤの預言が実現していくために、どうしても必要なことがあります。それは、人間の罪そのものを負いきる人の存在です。それは言うまでもなく、イエス様ご自身にほかなりません。そのイエス様が、地上で活動していく業が始まるために、新しい神様による開放の業が始まるために、言い換えれば、わたしたちが神様のものとされ、少しずつでもよい歩みをなすために、それによって命が保たれ、尊重されるようになるために、イエス様は地上に来られました。それは、イエス様ご自身がやがて神の独り子として懲らしめられ、失われるための歩みの始まりです。ここに私たちの希望があります。神様はこのようなご計画に従って、この時、ヨセフに働きかけられて、家族ごとエジプトに避難し、また、そこから呼び出されるということ全体を導かれているのです。

#### イスラエルへ

ところで19節では、以前、マリアを妻として迎え入れたとき (1：20)、そして、ヘロデの手から逃れるためにエジプトへ行くように命じられたとき (2：5)と同じように、今回もまた主の天使が夢で語りかけています。これがまさに、「わたしは、エジプトから私の子を呼び出した」という15節の言葉の実現であるのは間違いありません。ただし、ここではそれだけではなく、もう一つのことが行われています。それは、イザヤ書の預言に従って、イエス様の落ち着いた先が、段々に絞り込まれていくということです。新しいイスラエルの出発として、イエス様たちが帰っていく場所は、当然イスラエルのどこかでなければなりません。それは、天使が「イスラエルの地に行きなさい」とはっきりと語っているとおりです。しかし、この時代にイスラエルの範疇に属していたのは、ユダヤとガリラヤです。マタイでは当初、ヨセフたちはベツレヘムに住んでいたように描かれていますが (2：1)、しかし、ここでは、ベツレヘムやエルサレムを含む、広い意味でのユダヤ地方に行くことを恐れたということが22節に書いてあります。

## アルケラオ

ちなみに、ここで登場しておりますアルケラオは、ヘロデ大王の息子たちの中で、途中で殺されてしまった兄弟たちを除いては、長男にあたる人です。その性格は残忍で、最初から圧政を敷いたせいで、やがて追放されることになっていくのですが、このところにある通り、人々から大変恐れられていました。しかし、そのような悪い領主が、ここでは一定の働きをしているように見えます。ヨセフは、マタイにおいては、一貫して主の天使の言葉に従っていく人として描かれています。けれども、それは、何の判断もしないということではありません。ここでは、どこに住むべきかを思い悩んだ様子が見て取れます。アルケラオがいたせいで、ヨセフに恐れが生まれ、その恐れが迷いを生み、それによって夢の中で御心が明らかにされることが起こっています。このように家族の落ち着き先が絞り込まれるのは、預言者に与えられた言葉が実現するためだったとマタイは結んでいます。ちなみに、メシアがナザレに住むということを行った預言者はいないようです。そこで昔からこの所の解釈がさまざまになされてきました。例えば、イザヤ11章1節の「エッサイの株から一つの目が萌いで、その根から一つの若枝が育ち」とありますところの、枝という言葉はヘブライ語でネゼルというのですが、これがイエス様のなので、その住む場所もナザレなのだ、というような解釈です。

## 実現するみ心

それはそれで、いいような気がしますが、同じイザヤ書にはこのような言葉があります。「先に／ゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが／後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた／異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。闇の中を歩む民は、大いなる光を見／死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。」（イザヤ8：23、9：1）。これは明確にガリラヤから新しいことが始まる、そこにおいて、闇の中を歩む民、自分たちの力では、よく生きることのできない人間存在そのものを照らす光が輝いた、と語っています。まさに、その通りに、イエス様は、やがて成長し、このガリラヤからお働きを始めることとなります。そして実は、このイザヤ書の預言の言葉は、この後、洗礼者ヨハネが捕らえられ、イエス様が活動を始められる時のしるしの言葉として、マタイ4章（14節以下）でもう一度語られることとなります。神様のみ旨はこのようにして実現していきます。それに先立って、神様は、このところでイエス様たちを、エジプトからガリラヤに呼び出されましたのでした。

## エジプトから出る－自由の訪れ

イエス様が活動を始められる時、その所に光が射しこみます。そして、私たちはすでに、この光を見たものとされています。一年の始まりのこの時に、聖書のことばに聞き、イエス様の訪れの知らせに耳を傾けます私たちの所に、この大いなる光は、差し込んでいます。この一年、私たちが何をしようと、どこに行こうと、この光が私たちと共にあります。そして、この光であるイエス様がともにおられる限り、私たちはあの闇の業、自分の気分次第で、人を押さえつけようとする闇の力から守られ、自分もそのような業を行わず、健やかに自由に生きていくものとされるのです。

## 祈り

父なる神さま、あなたが時を支配して下さり、あなたの御赦しの中でわたしたちに新しい年が与えられておりますことを覚えて感謝いたします。私たちはすでに、御子と共に、新しい時代に生き始めております。この年、なお、世界には戦とその噂があり、流行り病があり、生活の厳しさへの不安があります。しかし、その中に、すでにあなたからの光が射しこんでおります。わたしたちがこの光をありありと見つめて、光と共に確かな歩みをなしていくことができますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。